

ホツマツタエ「ゆかりの地」を歩く
河津桜と、もう一つの来宮神社を訪ねて

吉田六雄

河津桜

春、早春、節分、立春、梅の花見、春一番、春の言葉には事欠かない。そんな季節に、染井吉野より早く咲く「桜」がある。その名は「河津桜」である。その昔の河津町は、川端康成の「伊豆の踊子」の舞台として有名であった。

だが最近では「伊豆の踊子」の舞台よりも、早咲き桜の「河津桜」の方が有名である。その桜は2月上旬より咲き始め、ほぼ1ヶ月間の長期間に渡り「桜まつり」のシーズンを迎える。今年も2月10日～3月10日であった。また今年も観光客が都市圏や周辺の町より押しかけた。そしてここ10年間の観光客数は100万人を越え、昨年(2007年)は119万人(河津町観光課談)であったとのことである。河津桜のある河津町の場所は伊豆半島の東先端に近い静岡県加茂郡河津町になり、桜並木は伊豆急行の河津駅前の桜並木～河津川の堤防沿いに、メイン会場、館橋、峰温泉周辺、沢田地区～大滝七滝と広範囲である。また桜の本数は会場周辺に約800本、町内では約8,000本と云われる。河津桜の特徴は、染井吉野の桜の「薄ピンク色」より「濃淡ピンク色」で優雅である。

だが「桜」ばかりでなく川沿いの4kmの桜並木の沿道には、農家の人の旬の野菜の数々、漁師が獲った金目鯛や蛤などの海産物の数々、定番のたこ焼き、焼きそばなど、また特産の河津桜入り羊羹などなど・町周辺からの「美味しい食料品」や「風味豊かな海産物」や「瑞々しい農産物」の出店が盛りだくさんで、桜祭りを盛り上げてさせてくれる。また出店の人とのお話にも、普段着の喋りに色とりどりと「人情味」の花を添えてくれる。

私の過去の記憶として、1972～3年頃に伊豆半島に友達と小旅行した思い出がある。その小旅行は、ホンダ軽自動車N360に乗り伊豆半島の中央部を、天城峠～下田市に抜けた。そして今夜の宿をと、飛び入りで河津町の宿にした。その時は「ひなびた温泉」の印象で「湯にのんびり」した思い出があった。それも今となっては、遠い昔になったが、今、河津桜のある河津町を垣間見て、昨今の「町おこし」の中で最も成功した町と思えて来た。そう思いながら歩いていると、ふと来宮橋と書かれた欄干近くに「来宮神社→こちら」のさほど大きくない看板を目にした。

(参考)

河津桜とは・・・

河津桜の原木は、河津町田中の飯田勝美氏(故人)が1955年(昭和30年)頃の2月のある日河津川沿いの冬枯れ雑草の中で芽咲いているさくらの苗を見つけて、飯田の屋敷に植えたもの(原木)です。1966年(昭和41年)から開花がみられ、1月下旬頃から淡紅色の花が約1ヶ月にわたって咲き続けて近隣の注目を集めました。・・・(省略)・・・この桜は河津町に原木があることから、1974年(昭和49年)にカワツザクラ(河津桜)と命名され、1975年(昭和50年)には河津町の木に指定されました。河津桜は大島桜系と寒緋桜系の自然交配種と推定されています。

来宮神社(熱海市)

来宮神社の言葉を耳にすると、すぐに熱海の「来宮神社」を思い出す人が多いと思う。その私もそうであるが、その熱海の来宮神社について「来宮神社の由来」を引用すると、「ご祭神、大己貴命、五十猛命、日本武命」とある。そして「社伝によるとおよそ三千有余年前大己貴命(大国主命)

が国を治めるため、遠い西の国(現在の島根県)より諸神を率いて海を渡り、伊豆の国のこの地に(現在の熱海の海岸)に上陸されて、この地方を治めになり・・・(中略)・・・ここに居を定められ、当神社がこの跡と伝えられている。・・・(後略)・・・」と伝えている。また来宮神社の特徴は境内に神木として、大楠(樹齢二千年以上の大木)があることである。そしてこの「来宮神社」はホツマツタエ研究者の間では、「来宮→キノの宮→東の宮」と読めるところから、ホツマツタエに関係が深い神社と思われている。

来宮神社(河津町)

話は脱線したが、来宮橋の欄干近くで見た「来宮神社→こちら」の看板が気になり、直ぐに来宮神社に行くことにした。それにしても「何故、この地に来宮神社があるの?」の疑問が先に立った。来宮神社へは3~4分で着いた。来宮神社の一番目の鳥居は、明神鳥居の形をしており南向きである。そして石畳の参道を20mほど歩くと、二番目の鳥居があり、鳥居の形は神明鳥居である。そして10m真向かいに神社の拝殿があった。お参りをしてふと頭上の神社名を刻んだ「名札」を見ると、「来宮神社」でなく、「杉榊別命神社(すぎほこわけのみこと)神社」と書かれていた。不思議に思い売店で「ご由緒」を尋ねると、由緒が書かれた1枚のA4の用紙を頂いた。

杉榊別命神社の由緒

由緒を見ると「杉榊別命神社(川津来宮神社)」とある。そして由緒の内容を更に見ると「1.キノミヤの由来、慶長十八年の棟木に木野宮大明神とありますが、その後は、来宮と称せられてきました。明治二年に、韭山県へ届け出る時に、延喜式神明帳所蔵の神社の旧称により、杉榊別命神社の名を復活させました。」とある。だが次の文章を読むと「来宮の名」が、無視できなくなってくる。「キノミヤジンジャは、古くは、伊豆半島南端の石廊崎から小田原にかけた相模湾沿岸に多数分布していた神社ですが、謎に包まれています。・・・中略・・・当社の神様は、海から来たと云い伝えられています。河津町谷津にある古い自然の港は、キノサキと云われ・・・後略・・・」と書かれていた。

伊豆半島に多数分布した来宮神社

それにしても来宮神社は、「伊豆半島南端の石廊崎から小田原にかけた相模湾沿岸に多数分布していた神社」の記述を見ると、他にもあることになる。

そこで「神社名鑑」を調べると伊東市に「八幡宮・来宮神社」があった。この来宮神社側の祭神は、「伊波久良和気命(イハクラワキ命)」となっていた。また中伊豆町にもう一個所「来宮神社」があった。この祭神は不明であった。

伊豆半島の神は、海から来た

もう一つ来宮神社の由緒で、気になる個所があった。熱海の来宮神社の由緒では、「諸神を率いて海を渡り、伊豆の国のこの地に(現在の熱海の海岸)に上陸されて」とある。また河津の来宮神社の由緒で気になる個所は、「神様は海から来たと云い伝えられています」の部分である。このふたつの由緒に共通する文章は、「神は海から来た」の表現であった。この「神は海から来た」の文章について、伊豆半島の他の神社にその記述がないかと捜した。すると隣町の下田市にある「白浜神社」の御由緒にも同じ様な「海から来た」の文章があった。御由緒の記載は「白濱神社の御祭神の三島大神(別名事代主神)は、その昔(今から二千年以上も昔のことです)南の方から海を渡って、この伊豆にやって来ました。・・・(後略)・・・」とある。この「神は海から来た」の文章表現が、更に気になって何年か無駄に過ごしてしまった。

伊豆半島とホツマツタエ

「神は海から来た」この神社の「由緒」の文章について、熱海、河津、白浜と3ヶ所の神社のご由緒に「神は海から来た」を確認することができたため、このことは真実であろうと確信できた。そこで「ホツマツタエ」文献と対比し検証してみた。すると疑問が湧いて来た。「海から来る」方法としては、一般的に「泳ぐか」、「船で来る」かの方法になる。それは今も昔も同じであろうか。そう考えながらホツマツタエ文献を調べると、20-21～24-4文に、「すでに紀元前約1200年頃に、帆船のワニ船に乗り、茨城県の九十九浜より伊豆の岬の沖を走る」様子が記載されていた。更に「鴨船に乗り、伊勢に行った」ことも記載されていた。このことに伊豆地方に「神は海から来た」の文章が残されていることは、当然のこの様に思えて来た。

20-21～22文

上総の ワニ船に乗り
 九十九浜に着きて

20-26～27文

九十九浜より 伊豆の岬に
帆お上げて 沖走る眼は
大空お 遙かに駆けり

24-4文

 伊豆の鴨船
伊勢に着け

この様に「古の神社」の由緒の検証は、昨今より始まったばかりですが、ホツマツタエ文献をもつて検証することで、今までわからなかった古代日本の一面が、現実のことであったことがわかってくる。このことが何より、ホツマツタエを研究している者にとって嬉しい。

(おわり)